

保育者を目指す学生との

関わりから見えてきたこと

小倉 定枝

はじめに

私は大学院を卒業後、保育者養成のコースを持つ福祉の専門学校に教員として就職した。約三年前のことである。保育現場での勤務経験があるわけでもない私に、保育を教える資格があるのだろうかと

いった不安を抱えてのスタートだった。しかし、子どもたちが幸せな幼児期を過ごせるための保育のあり方について、学生たちと共に学びながら考えていきたいといいう強い意志だけは十分にあった。そして、大学・大学院を通して学んだ、子どもを中心としてその心に添う保育を、できるだけ保育者として

現場に出て行く多くの学生に伝えていくことができればと考えていた。

しかし、私を待ち受けていたものは、当初想像していた以上に困難な学生とのかかわりであった。私は着任と同時に保育者を目指すコースの新入生男女合わせて六十名の担任となつた。担任の仕事は、主に週に一度のホームルームの機会を通じて、学生に事務的な連絡をしたり、必要な書類の回収を行うことを通して、円滑な学生生活のサポートをしていくことである。週に一度のホームルーム以外にも、学生の相談を受けたり、緊急の連絡をしたりなど、学生と関わる機会は日常的に生じた。

多くの学生との関わりにおいては、子どものための保育について共に考えることよりも、むしろ、興味を持って授業に望むこと、自分の行動に責任を持つて行動すること、自分のことばかりでなく他人のこととも考えながら生活していくことなどの大切さ

を学生に伝えていくことに多くの時間と労力を費やすことになった。担任として、また授業を受け持つ教員として、三年間にわたる学生との関わりから、感じたこと、考えたことをまとめてみたいと思う。

学生達に見られた傾向

他の専門学校を覗いたことがないので一概には言えないが、ともかく私の勤めていた専門学校の保育者養成のコースでは、教師が前に立つて話をすすめるだけでは授業は成り立たなかつた。授業はホームルーム単位で行われ、約六十名の学生は毎回同じメンバーで授業に望むことになる。ほとんどの学生が仲の良い友人同士で並び合つて座り、授業が始まつても自分たちの会話に夢中である姿を前に、私は途方に暮れた。机の上に肘をついたり、雑誌を広げて友人とあれこれと話しながら読んだり、お化粧道具を取り出して念入りにお化粧を始めたり、ジュース

を飲んだりと、そこは教室という公共の場ではなく、まるで彼らの家のようにあつた。

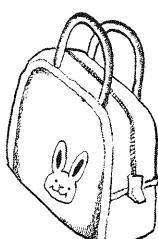
時々、授業を進めているこちらは、あたかもテレビのブラウン管の中にいるような感覚を持つた。彼らにとつては、授業を進めている教師は自分たちの世界とは異なる世界、例えるならテレビの中に存在しているのと同じであるように見えた。つまり、多くの学生が自らも教師と共に授業を創り出し得る存在だと認識しておらず、テレビを見ているような受け身の姿勢で授業に臨んでいるのである。授業中に見られるこのようない受け身の姿勢は、彼らが学校生活を送る上で基盤となっていたようだ。そして、受け身の姿勢を基盤とした行動には、ある傾向が見られた。

先に述べたように、私は着任と同時に六十名の学生の担任となつた。学生と担任の結びつきは非常に強く、学生達は自分の担任を頼りにして学生生活を

送っていた。私が担任していたある学生が保育所の実習に行くにあたつて、期日までに実習簿をとりに来なければならなかつた時、電話をかけてきた。

「先生、今、施設の実習中で他の日はアルバイトがあるって取りに行けないから、途中の駅まで持つてきて」という。「え？ それは持つていけないよ」といふと、「何で？ 実習簿の配布が実習と重なつたのは、学校の責任でしょ？」じゃあ、学校が何とかしてくれるのが当然じやん。先生持つてきてよ」という。私は、実習が終わつてから自分で取りにくるなり、友達に頼むなりして自分自身で何とかするようになつて電話を切つた。

その他にも、学生達の依頼心を感じる言動は日常生活中隨所に見受けられた。学生が書いたレポートに対し「ここを



「このように考へるのはなぜ？　そゝう考へる理由も書いてみて」と尋ねても、なかなか学生は考へてはくれない。すぐに「えー、難しいよ。わかんない。先生が考へて」という答えが返ってくる。自分で考へてみようとしないで、すぐに匙を投げて、その匙加減をこちらに託すのである。

同じように、学生に自分の行動に責任を持つて欲しいと思う機会も頻繁に生じた。提出されたレポートを読んで、そのレポートを書いた本人に「ここのこところは、どういう意味なの？」と尋ねると、返つてくる返事は多くの場合「え？　だつて、それは本に載つてゐるからそう書いたんだよ」といつた類のものである。また、ある学生が幼稚園実習で書いた指導案に、保育者の配慮事項として「お弁当を残さず食べている子どもを発表して褒め、他の子どもが残さず食べられるようにする」と書かれていた。そこで、「その子どもを褒めるのは、他の子どもがお弁

当を残さないようにするためなの？　先生に褒めてもらうためにお弁当を食べて、本当に楽しくおいしいごはんを食べられるのかな？」と聞いてみた。その質問に対する返事は「だって、私が行つた幼稚園では、現にそうやつてたもん」というものであつた。自分自身が作成したものや自分の行動に対する責任を、自分なりに引き受けたかったが、それが彼らにとつては難しいことのように思えた。

自分に対する自信

受動的な姿勢を基盤とするこれらの行動の背景には、学生達が自分に対し確固とした自信を持つことができないでいる事実があるようだ。自分に對する自信があれば、自分で書いたレポートや指導案の責任を他人に託すような言動をとることはないとであろう。私には、彼らが自分の行動の責任を他人にとつてもらうことで、自分自身が傷つくことを免

れようとしているのではないかと思えた。自分に対する自信は、何とか自分でやつてみようという気持ちを生み出し、その行動の責任を自分で引き受けしていくという態度につながると思う。彼らは、傷つくことを恐れて自分にできそうにないことにあえて挑戦してみようとはしない。

担任していたクラスの学生が、保育園や幼稚園の就職試験を受ける時期になった時のことである。ある幼稚園に見学に行って帰ってきた学生が、「あの園に行きたいけど、就職試験に鉄棒の逆上がりがあるから受けるのやめるね、先生」という。その理由を訊ねると、「だって、私、逆上がりできないし。皆が見ている前で失敗したら恥ずかしい」とのことである。私は、受験日までは日数があるのでから、あきらめないで練習をしてみるように励ました。しかし、結局彼女は努力をしてみる事なしに受験を諦めてしまった。こうした例を挙げればきりがない

程、多くの学生は傷つくことを恐れ、自信を持てないでいる自分を守ろうとしているように見えた。

枠にとらわれる学生達—彼らの保育観から—

なぜ、多くの学生はこのように、自分への自信が持てずに自分を守ろうとしていたのであろうか。彼らが今まで受けてきた教育に一つの解を見出せるようと思う。

その言動から一見自由奔放に見える学生達であったが、実はある枠組が彼らを支配していた。そのことは、高校を卒業したばかりの学生達が無意識のうちに抱いている保育観から見て取ることができる。

入学当初の学生に、ある保育者の子どもへの関わりの事例を読んで感想を書いてもらつたことがある。お片づけの時に、保育者が園庭でまだ遊びたい子どもの気持ちを大切にして、何度も一緒に滑り台を滑った後、思い思いの乗り物になりきつて部屋ま

で帰るという事例であった。これを読んだ学生の感想の多くが、「この保育者は、お片づけが始まっているのに、子どもと一緒に遊んでいて良くないと思う」など、お片づけという時間の枠を守らなかつた保育者に対する批判的な意見であった。また、「集団保育をするにあたつては、子ども一人ひとりの個性はなるべく把握しておいた上で、まとめられるようにならない。この子に合わせてこうするなど、ないようにしたい。みんなで生活しているのだから、みんなに合わせなければならぬことを伝えたい」と述べた学生もいた。

一見、自由奔放に振る舞つている学生達が、意外にも子どもに対しては「～をするときは～をしなければならない」といった枠にとらわれていたのである。無意識のうちに抱いているこうした保育觀は確固として学生の心の中に位置づいており、そこからなかなか抜け出しができないでいるようであつ

た。学生達は、一通り保育について学ぶと「子どもの自立心を大事にし、一人ひとりに合わせた保育をしたい」と述べるようになる。そう述べていても「けん玉を製作した後、ぶつからないように男女別のグループごとに練習を行なうよう声かけをする」と、子ども達をある枠に従つて行動させようとする指導案を書く学生も少なくない。

このように、学生達が枠にとらわれているのは、自分自身がそれまで同じような枠を与えられ、その枠に支配されてきたからではないだろうかと思えてならない。そして、保育の実践や思考を行な際、つ



い自分がそれまで受けてきた教育のあり方に頼つてしまふのではないだろうか。そうだとしたら、これまでの成長の過程において決められた枠に従つて生活してきたことが、学生の受動的な姿勢に何か関係があるはしないだろうか。自分が興味を持つたことには積極的に関わつたり、取り組んだりすることよりも、決められた枠の中で指示に従つて行動することの方を大切にされいたら、誰でも受け身にならざるを得ないのではないか。そして、その枠があることが当然のこととなつてしまふと、自分の判断において行動することが困難になる。自分で判断しない以上、失敗しても自分の責任ではなく枠組を作つた人間の責任ということになる。自分で決めて取り組み、成功したという体験がなければ、自分に対する自信が培われるはずもないだろう。

一方で、大人が造つた枠を取り壊そと、必死にもがく学生もいた。彼らは、高圧的な態度で枠を示

されると、それに對して「キレル」、暴れるといった形で抵抗した。しかし、こちらが彼らの気持ちに共感し、理解しようと努めていると、毎日のように教務室に寄り、何気ない会話をかわして満足そうに帰つていつたり、手紙やメモなどで來訪の痕跡を残していく。私は、彼らが自分の気持ちを理解してもらえることを求めているように感じた。

自分の気持ちを理解され、自らの興味を大切にされる体験こそが教育において重視されなければならぬ、私は三年間にわたる学生達との関わりの中で、このことをあらためて教えられた気がする。

今、学級崩壊や子ども達の「キレル」行動などが問題となつてゐる。この現象に対処するために、「枠」に子ども達をあてはめ、大人に従わせようとするだけはしてはならないと思うのである。

(元福祉専門学校教諭)